

ネパール現地報告 9

メモ (主要のみ)

5月12日

ネパール人有志ボランティア10数名からなる救援物資隊の医療担当として、カトマンズ近郊の古都サクーから北に7km、ラプシフェリ村へ。約200世帯に食糧と診察62人。村の建物はほぼ全壊もしくは半壊。

午後1時頃、帰路の山中にて昼食休憩中に大きな余震にあう。下方でサクー方面からかなり大きな土煙(家の倒壊によるものか)。二次災害の危険が高まりすぐにカトマンズへ戻る。午後3時頃、パタンの家へ帰宅。本日1時頃日本より到着のどさんこ代表大泉医師と合流。今までの経過を改めて報告、現状分析と今後どさんことして何ができるか話し合う。

深夜午前2~3時の間、2度ほど小さな余震あり。一時的に屋外へ避難。

5月13日(どさんこ大泉代表、樋戸コーディネーターと同行)

午前7時、緊急援助隊として赴任中の自衛隊精神科宮崎医師と、駐屯拠点の一つシャングリラホテルにて面談。(トリプヴァン大学カルキ教授、関西学院大学古川教授、ネパール語通訳アマリット氏同席)。17日午前7時半より、トリプヴァン大学社会福祉科の学生にたいし「震災後の心のケア」をテーマに講義頂くことに。

午前11時、トリプヴァン大学美術講師、画家のサリタ ドンゴル女史と、震災における、特に子供たちへの心のケアについて話し合う。ドンゴル女史より、被災村々での子供たちへのアートセラピーキャンプ開催の提案あり、14日午後、試験的に開催頂く予定。

午後12時半、HDCS本部訪問。保健担当カピル氏よりHDCSの今地震に対する取り組みを改めて説明頂き、追加の支援金をお渡しする。また大泉代表が13日~14日にラムジュン病院を視察することが決定。

午後14時半、日本大使館の山形医務官と面談。昨日の余震の影響を含めた状況をお伺いする。

午後15時、日本大使館、JICA, 自衛隊、日本赤十字、ネパールで活動中のNGO代表が集まり情報共有、意見交換の会合に参加(日本大使館にて)。

主な議題

- ・それぞれの団体の今地震に対する活動報告。
- ・緊急時の邦人向けの情報伝達、共有の在り方について。
- ・救援物資、支援金をどのように「必要としている人々」に届けるか。

知り得た情報、印象

各団体の活動拠点は違えど、必要とされているのはまずテント。テントは日本で購入、送付よりもインド、またはネパール国内で購入可能、その方が効率的かつ安価。

医療面では、「心のケア」が必要とされる時期、との認識が共有される。

午後19時、自宅にて名古屋大学病院勤務チャリセルシュン医師と、今後の医療活動に

ついて意見交換。

12日昼頃発生の余震の影響

4月25日の大地震後、一番大きな余震（M7.3）だった。13日午後時点での死者約60人。負傷者約2000人。落ち着きを取り戻していた最中での出来事、現在医療従事者は足りているものの5月末までに帰国予定だった緊急救助隊も滞在延長の可能性が出てきた。また、

- ・学校が15日から再開→29日再開に変更。
- ・空き地の避難テント、少なくなっていたがまた増えた（余震を恐れ皆外で生活している）。
- ・通常営業に戻りつつあった商店も、一部を除きまた閉店。